



News Letter No.14

Contents

- プログラムコーディネーターからのメッセージ
- ユニット長からのメッセージ
- GSS教員からのメッセージ
- GSS履修生の紹介
- 第15回GSSライジング・リーダー講演会
- 国際学術交流（実習系科目タイプB）
- 2016年度入学式およびオリエンテーション
- GSS実習系科目報告会の開催
- 博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2016
- 編集後記



プログラムコーディネーターからのメッセージ

寶 馨 防災研究所教授



グローバル生存学大学院連携プログラムは、京都大学の9つの大学院研究科と3つの研究所が連携し、安全安心分野の新たな学際領域である「グローバル生存学 (GSS = Global Survivability Studies)」を開拓することを目指す5年一貫性の博士課程教育プログラムです。この大学院連携プログラムでは、安全安心分野の国際的リーダーたるべき人材を育成することを目指しています。

入学式について

2016年10月1日にGSSプログラムの入学式が開催されました。新たに16名（L1生14名、L3編入生2名）の学生が加わりL1～L5までの5学年が揃いました。16か国から33名の留学生を含む総勢80名のプログラム履修者（うち女性は41名）を抱える大きなプログラムになってきました。また入学式の後にはオリエンテーションが行われ、履修の概要が説明されました。詳細については「2016年度入学式およびオリエンテーション」をご参照ください。

博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2016

また2016年11月11～12日にかけて博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2016が開催され、ヒルトンホテル東京お台場に全国33大学の62プログラムが集結しました。詳細は「博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2016」をご参照ください。

人事異動

特定助教の Florence Lahournat 博士が、国際高等教育院において学部1～2年生レベルの全学共通科目を担当する特定講師として12月1日より防災研究所に異動しました。これまで同様、GSSの活動に参加し、メンター教員の役割も継続いたします。

ユニット長からのメッセージ

塩谷雅人 生存圏研究所教授



GSSプログラムでは様々な研究科の教員が連携し、安全安心分野において社会のリーダーとなる人材の育成に向けた幅広い活動をおこなっています。今回のニュースレターでは「教員からのメッセージ」の記事として、アジア・アフリカ地域研究研究科の古澤准教授から「“生存”とは何かを考える」というタイトルで、GSSプログラムが目指す“生存”の意義について様々な観点から考察いただきましたのでご覧ください。

本プログラムでは若手の国際的リーダーとして活躍している方々をお呼びして「ライジング・リーダー講演会」を定期的に開催しています。9月5日に開催された第15回GSSライジング・リーダー講演会では、世界銀行上級ICT（情報通信技術）政策スペシャリストのNaomi Halewood氏をお迎えし、世界銀行の持続可能な開発とICTの取り組みについてお話しいただきました。詳細については「第15回GSSライジング・リーダー講演会」に書かれています。

GSSプログラムでは実習が重視されていますが、GSS履修生による第15回実習系科目報告会が9月に開催されました。異なる分野を専攻する学生が実習系報告会を通じてお互いの活動を知り、それぞれの研究の学際性をさらに高めていくことが期待されています。詳細は「GSS実習系科目報告会の開催」をご参照ください。

このニュースレターでは毎回GSSプログラム本科生の皆さんの紹介をおこなっていますが、今回は6名の学生さんについて紹介します。各研究科で学ぶ専門性とGSSプログラムで学ぶ学際性を通して、社会のリーダーとなるべき人材が着実に育っていることを実感していただけたいと思います。

GSSプログラムのウェブサイトについて

GSSプログラムの活動内容については以下をご参照ください。

<http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/>

GSS教員からの メッセージ

古澤拓郎
アジア・アフリカ地域研究研究科准教授



「生存」とは何かを考える

準備期間も含めるとグローバル生存学大学院連携プログラム(GSS)がスタートして5年が経ちました。いまさらですが、生存とは何でしょうか。みなさんはどのように考えて、これまで活動してきたでしょうか?生存とは、文字通りにいえば、生命を存続させていることになります。しかし、災害の生存者、飢餓での生存、難破船の生存者、生存の危機、などと言われるように、生存には、何とか生命を存続させられる、というニュアンスを含んでいるように思います。

GSS 本科生のみなさんは、それぞれ問題を抱えつつも、奨励金を受けとり、経済的には比較的恵まれていることでしょう。その一方で、世界にはその日を生きることすら困難な人々がいるという話を聞いたことがあるでしょう。日本の国内でも格差があり、経済的に困窮している人や、災害や事故などに巻き込まれて苦しい思いをしている人がいることを知っていると思います。「グローバル生存」という単語が想起させるのは、こういう危機にある人たちの生命を何とか存続させるということです。

この単語がもう一つ想起させるのは、いまや地球規模で、人類社会が危機にあり、それを存続させる、ということです。人類社会の生存です。これは持続可能な発展という概念によく似ています。ただ、個々の人間には寿命がありますので、ある生命が永遠に持続することはできない以上、持続可能な発展というのは、社会、経済、環境、生態系、文化といったものを半永久的に持続させることなのでしょう。

ところで、人間は「何とか生命を存続させられる」だけで良いのでしょうか。例えば食料だけみれば、人間1人に必要なエネルギー量は計算可能であり、それを充足するだけの食料を生産できれば良いことになります。私は研究でソロモン諸島を頻りに訪れていますが、この国は世界で最もGDPが低い国々の一つであり、統計上の食料生産も非常に低い国です。しかし村を訪れてみると、どちらかといえばふくよかな人たちが、最高の笑顔で迎えてくれます。食事を調査するとエネルギー所要量を満たしていますし、健康診断をすると体重過多な人が多いことがわかりました。イギリスのインペリアル・カレッジ・ロンドンを中心とするチームが世界中の健康デー

タを収集・解析するプロジェクトを行い、私もソロモン諸島のデータ解析で参画しました。その結果は2016年4月に著名医学雑誌Lancetにて公表されました。それによると、一般に栄養不足のイメージがあるアフリカをはじめとして、世界のあらゆる地域で1975年以降、低栄養状態の人は減り続けており、逆に肥満に相当する人が急激に増えてきていました。肥満というのは、様々な生活習慣病のリスクになることが知られています。今の世界は、いわゆる生存の危機どころか、栄養過剰で危機になっています。

人間は、他のあらゆる生命体と同じく、実は高い生存能力を生まれながらにして持っています。倭約遺伝子仮説というものがあります。かつて長期にわたり乏しく不安定な食料状況で生存してきた人間集団は、その自然淘汰の結果として、エネルギーを効率よく吸収する、エネルギーを貯蔵する、エネルギー消費を抑える、という倭約的体質を身につけたというものです。しかし食料生産が安定した時代になると、そのような集団は肥満や糖尿病にかかりやすくなります。食料の乏しい地域を数千年かけて移動した太平洋諸島民や、アメリカ先住民に生活習慣病が多いことを説明できる仮説です。つまり食料生産を安定させる技術、それを人々に行きわたらせる政策の結果として、人々は「何とか生命を存続させられる

ための努力から解放されましたが、むしろ本来の生存能力に比べて過剰ともいえる食料を得るようになり、新たな健康リスクにさらされているのです。

GSSは、高い理想を持つてはじまったプログラムです。GSSという生存とは、「何とか生命を存続させられる」だけではいけません。生命に、何らかの豊かさをもたらす、リスクを取り除きながら、存続させるためのものです。優秀な学生の皆さんは、すでにこのことはよくわかっていて、生存に様々な意義を足してくれました。アジア・アフリカ地域研究研究科だけを見ても、地域社会の伝統に学び、人々に寄り添い、歴史を調べ、現代社会をみつめ直し、自然との関わり方を問うなどして、人間が豊かに生きていくためのたくさんの研究成果をもたらしてくれています。いまGSSも、今後の展開を考えるときを迎えています。「生存」と真摯に向き合って、さらに発展することを願っています。

GSS 履修生の紹介

ウ・ドヒ

経済学研究科 (L1)



私 は経済学研究科の修士課程1年に在籍しており、労働経済学と契約理論、特に韓国の時間外労働に興味を持っています。長時間労働問題は韓国社会の慢性的な問題となっています。労働者一人当たりの国内総生産は3万ドルを上回っていますが、労働時間当たりの所得で表された生産性は、OECDでも最も低い国の一つになっています。賃金を下げる理由の一つとしてアジア地域の高い人口密度が挙げられています。それは現象を部分的に説明していると思いますが、それだけで説明するのは不十分です。長時間労働は離職率の増加を引き起こし、人的資本の損失と企業の生産性の低下や健康被害や労働者の生活の質の低下を招きます。私はこの双方が得をしない状況を継続させている既存の契約モデルにおけるインセンティブをどうすれば取り除けるかという問題に取り組みたいと思っています。この問題に取り組むことを通じて、契約理論だけではなく公衆衛生や社会の持続性の分野にも貢献したいと思っています。

私

は環境問題に興味があり、学部時代には気象学の研究室に所属していました。卒業研究では、日本の主要都市を対象にして気温ジャンプの現象について扱い、地球規模で気象現象は複雑にからみあっていることを改めて認識しました。学部時代の研究は、温暖化問題に興味を持っている自分にとって大変有意義なものとなりましたが、気象学の研究では自ら観測を行うことは稀で、大学院では自分で観測、解析を行いたいと考えていました。また学部時代に受講した集中講義を通じて、火山の重力を測ることで地下の内部構造を推定できるということに大変興味を持ちました。これらのことがきっかけで、大学院では測地学の研究室に進学しました。

現在は桜島を対象にして、相対重力計を用いて桜島の長期地殻変動と重力変化について研究しています。研究では、桜島中央部において地盤沈降と重力上昇が生じているという事実注目しています(Kazama et al. 2014, Figure 1(c))。この現象の原因は長期的に地盤が沈降しつつ、地下深部において質量及び密度の増大が継続しているためだと考えられていますが、具体的には明らかになっていません。この原因について考察したいと考えています。測定された重力値の様々なノイズを修正し、その後水準測量の結果とあわせて、既存のモデルとの比較を行いたいと考えています。そこから問題点を考察し、新たなモデルの構築並びに地下構造をより良く理解したいと思っています。

本研究を通じて将来的に桜島の防災がよりよく改善されることを目指すとともに、GSSのテーマである自然災害への対処、共存について貢献したいと思っています。GSSでは他分野の学生との交流も活発にあり、常に幅広い視野を持って研究に取り組める点が非常に良いと思っています。

平良 真純

ひらよし ますみ

理学研究科
(L1)

GSS 履修生の紹介

瀬川 裕美

せがわ ひろみ

医学研究科
(L1)



「人々の幸せと健康を支えるためのアプローチを実践し、地域保健の現場と政策を結びたい」これが私の目標です。

看護師として日本の病院で働いている時、人の人生に思いをはせ病気や障害と共にあっても幸せになれるようにケアをしていくことに対して看護学の可能性とやりがいを感じてきました。しかしながら幸せになるための医療であるはずなのに現代医療は人を不幸にしている側面もあるのではないかという疑問がありました。さらに現代日本の医療制度は持続可能ではないという確信がありました。そしてGNH政策にあこがれを抱きブータンで保健活動を行うなかで、地域や現場と政策をつなぐ必要性をより強く感じ、日本の行政保健師として働きました。仕事にはとてもやりがいがありましたが、一つの現場の課題を解決するためには、熱い思いや行動力で一人のスタッフとして働くだけでなく、保健医療の分野以外の専門家と連携しグローバルに物事をとらえて脆弱な部分を現場に即しながらきめ細やかに改善していくことが必要であると感じてきました。

夢や思いは捨てたら終わりであると信じて自分のキャリアについて考えている時に、見つけたものが大学院への進学でありGSSプログラムの存在でした。

GSSプログラムでは多国籍かつ多様なバックグラウンドを持った仲間と共に学ぶことが出来、さらに持続可能な社会を目指し社会的脆弱な課題について解決していく過程をテーマにしているという面に魅力を感じました。GSSプログラムを支えてくださっている皆様への感謝の気持ちを忘れずに、GSSプログラムの合同プロジェクトや学際プログラムなどを利用して人脈を築き、実践に即した学びを得ることで、Think globally and act locally を目指して日本の地域保健分野においても海外の地域保健分野においても貢献できるグローバルリーダーを目指していきたいと思っています。

私

は、以前、1か月間フィリピンでインターン生として、首都マニラでの災害リスクガバナンスについて調査していました。調査を通し、フィリピンが、次世代により良い発展を遂げるためには、減災・防災対策の促進が重要だという結論に至りました。また、インターン期間中に、仙台で第3回国連防災世界会議が開かれ、世界各国で防災・減災対策が重要であることを確信し、防災・減災の分野で働きたいと思い、GSSコースに入学しました。

現在、工学研究科社会基盤工学専攻で水文学を専攻しています。水文学は、もともと、地球上の全ての水の循環を解明するための科学ですが、水資源や洪水・渇水リスクの予測・管理をテーマに多くの研究が取り組まれています。近年、局所的な集中豪雨が頻繁におこり、洪水被害が増加しています。現在使用されている洪水予測は、河川の水位や流量を予測するものですが、実際は、気候変動や都市化の影響などで、降雨強度や分布や流出のパターンが変化し、内水氾濫や外水氾濫が同時におこる複合的な氾濫が起こっており、氾濫予測も含めた洪水予測システムが重要となってきています。私が、現在取り組んでいることは、リアルタイム浸水予測に関する研究です。この研究が、県や地方自治体に、緊急対応避難やハザードマップに重要な技術として貢献できることを期待しています。

GSS コースでは、生存学をキーワードに、他分野からの先生・学生が、安全保障における様々な問題に取り組んでいます。このような多様な背景をもった方との交流を深め、専門である工学的な視点に、学際的な視点を取り入れ、巨大災害分野の問題を解決していきたいと思っています。

山本 浩大

やまもと こうだい

工学研究科
(L1)



サジッド・ニサル

工学研究科
(L3)



「ロボットは、何世紀にもわたって用いられてきた外科療法に革命を起こす可能性を秘めているでしょうか？また、現代の外科療法の現場を改善するためには、どうすればそのような知能機械を開発できるでしょうか？私はこれらの疑問に対してははっきりとイエスと答えることを目標にして、手術ロボットの分野を研究しています。

私の研究は、特に外科療法の中でも低侵襲手術 (MIS)、すなわち手術に伴う出血を少なくし、患者の回復を早くすることを狙いとしたロボットのデザイン及び開発と関連しています。しかしながら、MIS は外科医にとっては非常に困難です。MIS を習得するには、手術道具を複雑に動かす必要があり、広範囲の訓練が求められるからです。

私の松野研究室での研究の目的は、外科医の手術能力を向上させるために、より賢い知能ロボット技術を開発することです。すなわち、ロボットの助けを借りて外科医の手術能力を向上させ、可能な限り外科療法を簡単にしたいと考えています。そのような医療ロボットは危機的な状況のみならず、平時においても非常に有用でしょう。そのような技術は国境を越えた遠隔操作を可能にし、医療の発達している先進国の人々だけでなく、発展途上国の人々にもその恩恵を受けることができるでしょう。

そのようなロボットを実現するには、多くの学問領域にわたる知識と精力的な学際的な共同研究を必要とします。GSSプログラムは他分野の教授陣や研究者との共同研究を行うきっかけを与えてくれています。GSSプログラムによるメンターシップ、研究費補助、副指導教官制度は専門性やリーダーシップスキルを高めるためのGSSの独創的な特徴です。私はこのプログラムのポテンシャルを最大限活用し、よりよいグローバル社会作りのためにロボット技術の利用を広めることを目指しています。

私

は地球環境学堂人間環境設計論分野の博士課程に在籍しており、今年度GSSプログラムに入学しました。

修士課程の時、社会的持続可能性と都市復興プロジェクトに関わり、トルコでは都市部での保全活動は農村部よりも早く開始されたことを知りました。それが農村環境保全の問題に興味を持ったきっかけです。

トルコ北東部のトラブゾンという都市の農村部で研究を行い、農村環境でも劇的な変化があることを知りました。それは、世界中で共通するグローバル化と近代化によるものです。それらは、農村の社会的適応性や、地域の環境変化、地域文化の物理的な表現であるヴァナキュラー (土地特有の) 建築などに色々な変化を引き起こしました。

上記のすべての要因を考慮し、私の研究では、農村部の建築の保全を促進することによって、より持続可能な農村環境を提供する方法に焦点を当てています。博士課程の研究を終えた後、私の研究が地元の人々と地方政府の両方のために役立つことを願っています。

このような学際的な研究に取り組むためには、多くの分野の知識について理解している必要があります。

GSSプログラムは、様々な経歴を持ち、実践的な経験だけでなく理論的な知識を持つ多くの専門家や学生と対話する機会を提供してくれると信じています。このようなGSSプログラムの利点を最大限に活かしたいと思っています。

ヴァル・エリフ・ベルナ

地球環境学堂 (L3)



第15回 GSS ライジング・リーダー講演会
世界銀行の上級 ICT 政策スペシャリスト・Naomi Halewood 氏を迎えて

清水美香 GSS特定准教授

9 月5日、第15回GSSライジング・リーダー講演会として、世界銀行上級ICT（情報通信技術）政策スペシャリストのNaomi Halewood 氏をお迎えし、“International Development in the Digital Age”と題し、開発分野での14年以上にわたる経験に基づいてお話いただきました。世界銀行が実施する持続可能な開発のためのICT政策を中心に、エジプトなどの実際のプロジェクトケースを取り上げながら、防災、医療、農業、教育といった学際的分野へのICT適用の最新動向について紹介頂きました。各方面からの研究科の学生や先生方が参加し、現場のお話に熱心に耳を傾けておられました。

また ICT 政策のみならず全体的に世界銀行のプログラムにおいて、学際性・分野横断性が重視される傾向にあり、分野横断的な取り組みを実際のプログラムに如何に組み入れているかが、各プログラムマネージャーの主要評価項目（KPI: Key Performance Indicator）の1つになりつつあることも紹介されました。その意味でもGSSの取り組み・方向性との関係性において刺激的なセッションだったと思います。

さらにGSS履修者に向けた国際機関でのキャリア開発のアドバイスとして、ご本人はインターンから始められたこと、コンサルタントとしての仕事から入っていくのも一方法であること、また世界銀行のcountry officeなどを通じて、関係者とのネットワーク作りから始めるといいのではといったアドバイスがありました。



ライジング・リーダー講演会の様子

国際学術交流（実習系科目タイプB）

西淵光昭 東南アジア研究所教授

2 016年9月10日～9月19日、インドネシア西スマトラ州バダラン市のアンダラス大学医学部での食品中の病原微生物検査に関するワークショップを中心として、GSS履修者は、現地の大医学部関係者、周辺地域の検査技師や地元の人々との交流を深めてきました。GSS側からの参加者は（以下敬称略）、教員3名（東南アジア研究所の西淵光昭、中口義次、Kayali Ahmad Yaman）、現地で研究活動に従事していた協力者1名（甲斐丞貴 [アジア・アフリカ地域研究研究科]、および本科生のプログラム履修者3名（禹到希 [L1、経済学研究所]、立山由紀子 [L2、医学研究科]、Jinsen Zheng [L4、農学研究科]）でした。東南アジア研究所とアンダラス大学医学部との学術交流協定の締結記念式典に続いて、ワークショップが開催され、GSS履修者たちは、ワークショップで積極的に参加者の技術指導に従事し、またそれ以外の自由時間も有効に活用して、それぞれの目標をほとんど達成しました。すなわち、発展途上国における食品の汚染状況を自らの検査で体感したのみならず、外国人研究者や技術者の指導やheart-to-heart communicationからスタートする情報収集に関するノウハウを身につけ、また歴史と食習慣に触れて食の安全安心を考える経験を積みました。



ワークショップの様子（撮影：東南アジア研究所中口義次連携准教授）

2016年度入学式およびオリエンテーション

工藤晋平 GSS特定准教授

2 016年10月1日に、GSSプログラムの入学式が行われました。新たに16名（L1生14名、L3編入生2名）の学生が加わり、33名の留学生を含む、80名のプログラム履修者（うち女性は41名）を抱える大きなプログラムになってきました。入学式は塩谷雅人ユニット長の開会の言葉で始まり、実プログラムコーディネーターより新入生の紹介が行われた後、入学者を代表して、マヘーシュ・マドゥ・ゴクテさんによる宣誓がありました。その後、実プログラムコーディネーターより挨拶があり、履修者がこれから取り組むことになるグローバル生存学という学際領域について、そのアイデンティティとフレームワークの説明が行われました。

入学式の後はオリエンテーションが行われ、カリキュラム委員のフローランス・ラウルナ特定助教から履修の概要が説明されるとともに、GSSプログラム独自のe-ポートフォリオシステムであるGSSfolioについて、近藤久美子特定准教授より紹介がありました。その後、GSS Student Association（GSA）から学生代表のL3の大津山堅介さん、L2の中村亮介さんが参加して、GSAの紹介と、1月に行われる国際アドバイザー会議のアナウンスをしました。



写真1：新入生代表のマヘーシュ・マドゥ・ゴクテさんによる宣誓



写真2：年長GSS履修者によるGSS Student Associationの紹介

GSS 実習系科目報告会の開催

伊藤伸幸 GSS特定助教

G SS履修生による第15回実習系科目報告会が2016年9月27日に開催されました。報告会では発表者1名につき10分のプレゼンテーションと10分の質疑応答の時間が与えられ、それぞれの学生が自身の国内外における活動の成果や今後の課題について報告し、評価を担当したカリキュラム委員の教員や学生らと活発な議論を行いました。報告会（表）では、アジア・アフリカ地域研究、医学、経済、工学、農学、教育学、情報学のそれぞれの研究科から計21名のGSS履修生が参加し、フィールド実習やインターンシップ、国際学術交流、産学連携プロジェクト、国際共同プロジェクトの活動について報告しました。異なる分野を専攻する学生が実習系報告会を通じてお互いの活動を知り、それぞれの研究の学際性をさらに高めていくことを期待したいです。

表：第15回GSS実習系科目報告会発表題目一覧

名前	科目	題名
Yukiko Tateyama	FT	A pilot study of knowledge, attitudes, and behaviors related to non-communicable diseases in selected urban and rural district of Zambia
Yukiko Honda	IN	Protecting Kids from Unintentional Injuries – Learnings from the Activities of Safe Kids Japan.
Yuma Daito	IN	The participatory bridge construction in local village of Zambia
Xiaojie Tian	IN	Enhance the Sustainability of Culture and Nature with Children through Academic Exchange
Lukhele Bhekumusa	IN	Mathematical Models of the Epidemiology & Control of Infectious Diseases
Mitsuhiro Takada	IN	What I learned from internship in north California
Takashi Sugiyama	IA	International Academic Exchange in The 6th Annual Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management and The 31st International Congress of Psychology
Yukiko Honda	IA	What is the Life Course Research?: Theories and Methods
Yuma Daito	IA	Trend of sustainable concept research in the Engineering field through the international conferences
Fuko Nakai	IA	Evaluation of Evacuation Plan: Taking Account of the Uncertainty around Tsunami sand the Adherence of Evacuees -Intensive Week for Discussion with a Perspective of Risk Studies
Yukiko Tateyama	IA	RENKEI Interdisciplinary workshop on Living with an Ageing Society
Fuko Nakai	IU	Collaborative Development of Tsunami Evacuation Strategy Dealing with Car Usage among Residents, Municipality, and Scientists
Chikara Okada	IU	The Industry-University Collaborative Research Project
Yukiko Honda	IU	The Custom Made Leaflet for Emergency-Contact: Tsunagari-sheet: A Workshop on Community-Based Disaster Education in Yokohama
Han Xue	IU	Water quality change by runoff loaded with Non-point source pollution in upstream Lake Tianmu Basin
Sachi Matsuoka	IU	The project report: Producing Indian traditional liquor with Japanese herbs for enhancing the human survival by health promotion
Yuma Daito	IU	Planning and launching the road construction project in Burkina Faso
Hiba Abuelgasim Fadlelmoula	IC	Capacity Building for Evidence Based Practice and Policy making in HealthCare in Sudan -Phase I
Ryo Ohyama	IC	Holding the International-Interdisciplinary Workshop with Fudan University
Lukhele Bhekumusa	IC	Well-being of Youth in School Happiness Computer Literacy Project
Yukiko Honda	IC	The Custom Made Leaflet for Emergency-Contact: Tsunagari-sheet - a Workshop on Community-Based Disaster Education in Philippines

注）科目名のFTはフィールド実習、INはインターンシップ、IAは国際学術交流、IUは産学連携プロジェクト、ICは国際共同プロジェクトの略です。

博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2016

吉川みな子 GSS特定准教授

2

2016年11月11～12日にかけて博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2016 が開催され、東京お台場に全国33大学の62プログラムが集結しました。GSSからはL4の 許沖さんと安間更紗さん、L3の伊東さなえさんと大津山堅介さんの計4名の学生、塩谷雅人GSSユニット長および私が参加しました。招待講演、産学・学生ラウンドテーブル、学生と企業の意見交換会、JSPS講演、文部科学省説明会、学生討論会に加えて、本年度からの試みとして出口、すなわち学生の就職先を意識した分科会などが行われました。GSS履修者がほかのリーディングプログラムの学生と交流する時間があまりなかったことは残念でしたが、とくに意見交換会では、各自の研究内容について企業からの訪問者へ説明し、本フォーラムは有意義な機会となりました。



意見交換会での4名共同のポスタープレゼンテーション

編集後記

本号を準備中、GSS Student Association (GSA) のメンバーは、1月24～25日に行われる国際アドバイザー会議の準備に励んでいます。本会議はGSSの主な年中行事の一つで、学生にとっては、学生どうし、内外の専門家、GSS教員らと交流する絶好の機会となります。

このGSSプログラムには、専門知識を深め、自身の取り組みを発展させ、視野を広めるといった特色があります。本GSSニュースレター14号では、そのような構想を反映するものとして、ライジング・リーダー・セミナー、国際学術交流、リーディング・フォーラムなど、プログラムにおけるさまざまな活動やイベントについて報告しています。

本号が発行されるころには、年を越え2017年を迎えているでしょう。教員の代表として、新年が皆様にとって実り多いものとなりますようお祈りします。成長への意欲と広い心をもちつつ、GSSプログラムやその他の活動において、充実した1年を過ごしていただきたいと願っています。

GSS ニュースレター (No.14) 編集担当 フローランス・ラウルナ

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
Inter-Graduate School Program
for Sustainable Development and
Survivable Societies

Newsletter No. 14

平成29年1月20日発行

編集 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
ニュースレター編集委員会

発行 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
京都大学学際融合教育研究推進センター
グローバル生存学大学院連携ユニット
京都市左京区吉田中阿達町1
TEL 075-762-2197
URL <http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/>